

手紙、この楽しきもの

群馬県 新井国彦

夏目漱石ですら

夏目漱石は手紙を書くのももらうのも大好きだったといひます。ただの好きではなく、「大好きだ」というのです。特に長い手紙をもらった時などは、自分のためにこんなに長い時間をかけてくれたのだと喜んだそうです。

文豪とも呼ばれた人の手紙ですから、流暢で格調高いものかと思いきや、『漱石書簡集』（岩波文庫）夏目漱石三好行雄編などを読んでみると、身辺の雑事などを書いたものも多く、また誤字脱字なども時折はあったようです。こうしてみると、手紙は、書きたいように書けば良さそうですし、誤字脱字なども漱石さえもと思えば恐れることもなさそうです。

手紙をいただいた時の喜びを思うと、字の上手下手、内容のいかんを問わず、「くださった」ことに感激するわけ

なのですから、できるだけ出したほうが良さそうです。手紙を書いている時間は、その人のことを思っている時間です。だからこそ受け取った人はうれしいのでしょう。

手紙を倣う

私は国語の教師でもありますので、初めから手紙をよく書いたかといひますと、そうではありません。筆まめであることはとても良いことだろうとは、何となく思っていました。はがきなども手元に置き、いつでも書けるようににはしてありました。でも、書く相手、時、内容などに気づかず教師人生の半分以上は過ごしてしまいました。

手紙をよく書くようになったのは、手紙をたくさんもらうようになったのがきっかけです。それは、内堀一夫先生（私たちの勉強会『まごころ塾』の塾長・平成22年5月ご逝去）と出会い、たくさんの方からハガキ、封書をいただいたことです。

平成十年ころでしたでしょうか。どうも職場にしっくり行かず、仕事にも情熱がもてないでいるような頃でした。友人が、おもしろい人があるから会ってみないかと。初対

面で酒を酌み交わしつつ話した光景を懐かしく思い起こします。内堀先生は、これまでに会ったことのない情熱家で、本のこと、人のことなど多岐に渡る話に、友人の紹介どおり、「おもしろい人だ」と感じ入りました。その時、鍵山秀三郎さんや金平敬之助さんなどのお名前もうかがいましたが、話題の一人物程度にしかとらえることができませんでした。後から考えると、実に素晴らしい人たちと引き合わせてくださろうとしていたのだと気づかされるのですが。

さて、この内堀先生。手紙の送受量が半端ではないと思われまふ。実際に数を聞いたことはありませんが、私自信がいただいたもの、友人に届けられたもの、知人への手紙送付の頻繁なこと、それらを総合すると大変なものだと思います。内堀先生が退職されるお祝いの会で、友人とハガキを200枚贈ったことがありますが、その折出席されていた鍵山秀三郎さんが

「内堀先生、そのハガキは3日ほどで使ってしまうのではありませんか。」

と笑顔でおっしゃったのを、当時私は冗談のようにお聞きしていましたが、あながち大げさな話ではないと、今さらながら思います。

内堀先生と初めて会った後、日を置かずお礼状が届きました。楽しかったこと、ご縁に感謝しているとのこと、そして話題になったことへの補足など、行き届いたものでした。会ったばかりで、しかも酒を飲んで適当な話をただけなのに、このように心を込めた手紙を出してくれるとは、すごいものだなあと感心しつつ、返信しました。するとすぐにまた手紙が届きます。返信の内容に触れ、ご自身のことやこれから人に会うので一緒に行ってみないかというような内容です。私もその頃、返事だけは確実にと胆に銘じていたので、また返信します。そうやって手紙を書くことを内堀先生に実践指導していただきました。指導と言いましたが、具体的に書き方などについてあれこれ言われたわけではありません。手紙のことについて尋ねれば、いろいろ教えてくださいますが、内堀先生は、こうしたほうが良いとか、あしななければいけないとか、そんなことは一切おっしゃる人ではありませんでした。ただ自分から手紙を出され、返信を喜び、感謝とねぎらいの言葉をくださいました。

私は内堀先生の手紙のペースについてゆくことが出来ました。中には手紙を送られて困ってしまう人もいます。うでした。次々と届くことがあるので、ありがたいのだけ

れど、自分が返信できない申し訳なさと、送ってくださいる
思いを想像すると重荷になってしまうのだと思います。

返信のこと

「手紙の返事は打てば響くように出す」

これは、YPCのずっと以前の号にも書いた言葉ですが、
私の大事にしている信条の一つです。月刊『剣道日本』の
中で、ある剣道の大家が日頃大事にしていることとして紹
介したものでしたが、その方の高齢にしてなお節度ある生
き方に敬服し、即座に倣おうと深く心に刻んだ言葉でした。
というのは、手紙について後悔の思いが心の内にあった
からなのです。それは、教え子からの手紙にいつまでも返
信しなかった申し訳なさです。その子は、高校に行き、現
実の生活に悩んで、どう考えたら良いか、どう対処すべき
かを尋ねてきたのでした。それに対して私は、すぐに返事
をすべきだったのに、しなかったのです。今思うと、内容
より、「その時」、私の言葉が聞きたかったのだと思うの
です。しばらく経ってから返事をしたものの、相手の気持ち
にそぐわないものであったという後味の悪さが残ってし

まいました。

そんな思いが胸の内にあったからこそ、返事は打てば響
くように、と心がけるようになりました。内容は二の次で
す。言葉をかけられたら返すのが礼儀ですから、まずは応
えておき、不足があれば追って書きをすればいいのだと思
います。

鍵山秀三郎さん・金平敬之助さん

「群馬の人は、鍵山秀三郎さんと金平敬之助さんを神様
のように思っているんだねえ。」

と私のお世話になった読書家、若林茂さん（ワシントン大
学客員教授・平成22年9月ご逝去）が笑いながらおっしゃ
ったことがあります。

若林さんのHP <http://www.waka-mail.com/>

たくさんさんの本の紹介や映画案内、旅行記があります。
「そうですね。私の周りの友達は、それぞれの方を慕い、
あこがれるような思いでいますね。」

と応えたのが思い出されます。

鍵山秀三郎さんは、複写ハガキを使われ、楷書で丁寧に

書かれます。日常の行動ばかりか手紙も礼儀正しく、ただとこちらの姿勢も正されるような感じがいたします。郵便番号は四角の中にきっちりとボールペンで、宛名は筆字で。細やかな心遣いです。返信も見事です。私が複数の方に同内容で発送すると、一番に返信が届くのが鍵山さんです。おいそがしい日々を送っていらっしやるのに、ゆるがせにしないのです。睡眠時間を削っても返信されるお姿にも「神様」が垣間見える気がします。

学校が荒れ、思うように我々教師の言葉が子どもたちに届かないので、私が悩みごとを書き送った時には、懇切丁寧に心構えを書いてご返信くださいました。職場の同僚とそれを読み合い、「ありがたいですねえ。励まされますねえ」と言い合って、また仕事に向かったこともありました。

手紙と言えば金平敬之助さんです。この方も残念ながら亡くなってしまいました。（平成21年6月ご逝去）最後の手紙は、平成21年5月30日付けのハガキでした。

「凜」の話を 元担任した お子さんと

会話をした話が 好きです

とありました。これは、私の学年通信「凜」にまつわる内容ですが、金平さんは最後まで相手のことを思っ手紙を

書かれる人でした。このハガキの文字を見つめると、死期が近いのに、「新井さんはこんな思いでしょうね。このお子さんとの心のつながりを大事にしないね」とやさしく語りかけてきてくださる、その声が聞こえてくるようです。震える手にペンを持って書かれている姿が思われ、人にやさしく、自分にはきびしく生き抜かれたことに「神様」が見えるのです。

金平さんは、ハガキの達人です。簡にして要。しかも相手中心の内容です。もらった人が喜ばないはずがない。だから金平さんに接すると、みんなファンになってしまうのだと思います。

そもそもなぜハガキかを考えてみると、やはり相手の人のことを思っのことだと思ひます。長くない。いつでも読める。大げさでない。本もたくさん出されていますが、みな一つずつの文章が短いのです。さらっと読めるようにして読者に負担をかけたくないとおっしやっていました。言葉を切り詰めるために並々ならぬ努力をされてましたし、短い中に心を込める感性にはいつも驚かされました。『一枚のはがき』金平敬之助 P H P エル新書 を読むと、手紙を書きたくなります。

手紙って、いいものです。